

茨城大学学報

第341号

平成30年10月～平成30年11月



茨苑祭とホームカミングデーで賑わう水戸キャンパス

INDEX

- ◆ 多様な学びやキャリアへの理解を深める場「iOP ラボ」を開設
- ◆ 世界湖沼会議で研究・教育の成果を発信 三村学長の基調講演も
- ◆ ナビタイムジャパン・水戸市との連携でビッグデータ用いた地域活性化
- ◆ 第1回茨城大学学術講演会を開催
- ◆ 職員外部研修についての報告会を実施
- ◆ 青山学院大学の三木学長ら招き「テクノロジーの進展と人間社会」講演会

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 多様な学びやキャリアへの理解を深める場「iOP ラボ」を開設

本学では、学生が学内外の多様な人たちと交流してインターンシップや地域活動、あるいは自らのキャリアについて理解を深める場を創出することを目指し、「iOP ラボ」という新たな取り組みを始動しました。

本学では、2017年度入学生から導入されたカリキュラムにおいて、3年次の第3クォーターを「iOP (internship Off-campus Program) クォーター」と呼び、原則的に必修科目を開講せず学内外での多様な学びを促す学期と定めています。この期間は、学生たちが海外研修、インターンシップ、サービスラーニング、発展学修などに取り組むことが期待されており、来年度からの本格的な開始に向けて意識啓発を進めています。

「iOP ラボ」もその一環で企画されたもので、本学の水戸キャンパスの図書館の一角にあって学外者の出入りも多い「インフォメーションラウンジ」などを拠点に、学生が「iOP クォーター」での活動や自らのキャリアのイメージを広げられるようなイベントを、定期的実施します。今年度は試行期間と位置づけ、将来的には本学内の「サードプレイス」として常設化することも構想しています。

10月5日に第一弾イベントとして実施された「場づくりラボ」には、夕刻からのスタートにも関わらず、さまざまな学部・学年の学生や他大学生など20人以上が集まり、自分たちにとって理想的な居場所や、新たな交流やアイデアが生まれる仕掛けについて、ワークショップ形式で話し合いました。参加者からは、「『場づくり』に興味がある人と交流できてよかった」「実際に『場づくり』を行っている人の経験談などを聞きたい」といった感想が寄せられ、今後の「iOP ラボ」自体の運営に参加したいという学生も多くいました。

iOP ラボの情報は、ホームページ (<http://www.ibaraki.ac.jp/commit/ioplav/>) で随時発信します。



「場づくりラボ」ワークショップの様子



参加者で記念撮影

◆ 世界湖沼会議で研究・教育の成果を発信 三村学長の基調講演も



三村学長による基調講演

第17回世界湖沼会議（いばらき霞ヶ浦2018）が、10月15日～19日、茨城県のつくば国際会議場などで行われ、創立以来、湖沼にかかわる多様な研究・教育を進めている本学からも、三村信男学長が基調講演を行ったほか、教員や学生・大学院生が分科会などで研究成果を発表したり、展示会に出展したりしました。

世界湖沼会議が茨城県内で開催されるのは、1995年の第6回に続き2回目

で、今回は「人と湖沼の共生—持続可能な生態系サービスを目指して—」がテーマ。本学は後援団体としても名を連ねた。

初日の15日には、三村信男学長が「地球環境の変動と湖沼の未来」というタイトルで基調講演を行いました。三村学長は地球環境工学を研究する立場から、湖沼の環境に気候変動などがどのような影響をもたらすかを、多数のデータにより示唆。その上で、「閉鎖性水域である湖沼は環境の変化に対して脆弱だが、同時に、外からの圧力に対する適応力も有している。それぞれの地域の湖沼の個性にあわせた賢い利用（wise use）によって湖沼の健全性を維持することこそが、気候変動適応の基盤になる」と述べ、住民が湖沼に関心を持ち、その恵みを実感することが重要であると指摘しました。この観点は会議最終日に採択された「いばらき霞ヶ浦宣言2018」にも盛り込まれました。

また、各種セッションや分科会では、本学から計25編の口頭発表やポスター発表を行ったほか、3人の教員が分科会で座長を務めました。

さらに、会場内の多目的ホールで実施されている展示会では、茨城大学もブースを設け、湖沼にかかわる多岐にわたる取り組みを、貴重な資料やパネル、観察の体験コーナーなどによって紹介。霞ヶ浦の一部を成す北浦に生息する魚類について、1960年代に採集された魚類と、2010年代に採集された魚類とを、標本写真を並べて紹介する大型パネルや、特定外来生物のチャネルキャットフィッシュ（別名アメリカナマズ）の剥製などの資料が、多くの来場者の関心を集めていました。



展示会の様子

◆ ナビタイムジャパン・水戸市との連携でビッグデータ用いた地域活性化

本学の工学部・大学院理工学研究科が、株式会社ナビタイムジャパン（東京都港区）並びに茨城県水戸市と、「地域活性化を志向した共同人材育成インターンシップ学生派遣に関する覚書」を締結しました。今後、本学の学生がナビタイムジャパンや水戸市でのインターンシップを通して、ビッグデータを活用した観光振興の取り組みや、データや ICT を活用した地域課題の解決について実践的に考察し、企業・自治体・大学の三者の連携による地方創生とそのための高度な人材育成に共同で取り組んでいきます。

ナビタイムジャパンは、公共交通や車のナビゲーションやトラベルサービスなどを日本人向けおよびインバウンド旅行者向けに提供しており、近年はそれらの利用ログ情報を活用した観光データ分析技術やサービス開発実績、知見を活かして、地方誘客に向けた取り組みを自治体・企業向けにも行っています。

また、水戸市においては、各種統計データ等のエビデンス（信頼できる根拠）に基づいた政策立案や、行政機関として有するデータの積極的な加工・公開（オープンデータ）の取り組みを進めています。

加えて本学では、必修科目を原則的に開講せず学内外での自律的な学修を促す学期（iOP クォーター）の導入や、大学院理工学研究科のオフクラスプログラムの新設などにより、学生の地域活動やインターンシップの機会を積極的に拡充しています。同時に、学部の枠をこえた全学的なデータサイエンス教育の強化も進めています。

今回の連携事業は、ナビタイムジャパンが提供するトラベルサービスと、水戸市が有する観光情報とを組み合わせることで、観光客の増加や地域の振興につながる効果的・効率的な観光振興の戦略づくりやプロモーションの実現可能性を図るものです。本学の大学生・大学院生は、ナビタイムジャパン、水戸市それぞれでのインターンシップを通じて、そのための調査や ICT を利活用した行政運営についての実践的な研究を行います。

10月29日(月)に水戸市三の丸市民センターで行われたキックオフミーティングで、米倉達広教授は、「海外から茨城県内へのお客さんの足取りをつかみ、効果的なPRを行うことでおもてなしを向上させることにつないでいければ」と意義を説明しました。また、ナビタイムジャパンでインターンシップを行う工学部4年の奥井雄大さんは、「インバウンド拡大への対応が地域のキーとなる、ということに共感した。研究室に閉じこもることなく、観光の現場で取材を行うような経験を、自分の今後に活かしたい」と意気込みを語りました。

今年度の事業では9人の大学生・大学院生が週1日程度のインターンシップに臨み、12月に予定している報告会において、ナビタイムジャパン、水戸市それぞれでの成果を報告することになっています。



水戸市の担当者による説明



インターンシップに参加する学生たちと各機関の担当者

◆ 第1回茨城大学学術講演会を開催

10月29日（月）、平成30年度第1回茨城大学学術講演会を実施し、全学の職員120名以上が参加した。

本講演会は、本学の教員がどのような研究を行い、どのような研究成果があるのか、それらがどのように社会へ還元され、貢献しているのかなどについて、大学職員としてより理解を深めることを目的とし、記念すべき第1回として三村信男学長が講演者となり開催されました。



岩切健一郎事務局長からの挨拶後に三村学長が登壇し、「地球環境の変動と湖沼の未来」というタイトルで講演を行いました。本講演は、今年10月15日～19日に開催された『第17回世界湖沼会議（いばらき霞ヶ浦2018）』で、三村学長自身が基調講演した内容が基になっており、地球環境工学を研究する立場から、湖沼の環境に気候変動などがどのような影響をもたらすかについて、ドローンで撮影した霞ヶ浦の映像等を交えた説明がありました。

講演に続く質疑応答では、参加者から「地球規模の環境問題を語る中で、国立大学はどのような役割を担っていけば良いか」との質問があり、三村学長から「大学の特徴である中立的な立場や専門的な知識が、行政同士の議論の場でもっと積極的に活かされるよう発信してゆくべきである」という旨の提案があるなど、終了予定時間を超えるほど盛況の内に幕を閉じました。

本学では、今後もこのような講演会を通して、職員に対する研究成果の理解向上に努めることとしています。



三村学長による講演の様子

◆ 職員外部研修についての報告会を実施

10月30日（火）、外部機関での研修を経験した職員による報告会を実施し、全学で約50人の職員が参加しました。



3人の職員が報告に臨んだ

今回の報告会に登壇したのは、昨年度から行政実務を文部科学省にて研修している光井聡志さん（本所属は同大人事労務課）、宇都宮大学で短期派遣研修を行った学生支援課の江口裕之さん、国立大学一般職員会議（コクダイパン）に参加した人文社会科学部事務部総務グループの根本友美子さんの3人です。

光井さんは、文科省での教職課程認定に関わる業務や国立大学法人の財務分析業務の経験を紹介し、「教育行政についての大きな視点を得たとともに、文科省内の許認可のプロセスを経験したので、大学に戻ってから申請業務などに関わる機会があったらぜひ活かしたい」と意義を述べました。その上で報告会の参加者に向けて、「最初は不安だったが、今は心の底から参加して良かったと思っている。迷うぐらいならぜひ参加して」と呼びかけました。

江口さんは、宇都宮大学において修学支援課と学生支援課の業務に参加し、奨学金・授業料免除業務についての意見交換も行いました。その中で、宇都宮大学における大学院奨学金返還免除の推薦枠配分方法（ドント方式）が印象に残り、本学でも採用できないか課内で提案をしたところ、現在関連の委員会での検討が進められているということです。そうした気付きが得られる点を評価する一方、江口さんは、「2週間の研修は意義があるが、時期や業務のミスマッチ、派遣元でのサポート体制などは課題となる」と指摘しました。

根本さんは「コクダイパン」において、大学職員としての理想の働き方を考えるワークショップに参加。根本さん自身も「仕事以外も充実させるための業務改善」というテーマで事例紹介に臨み、TO DO リストの活用やメール作成の工夫などの方法を紹介したところ、後日、他機関の職員から「参考になったのでさっそく自分も試してみた」という報告があったそうです。根本さんは、「他機関の人とつながることで、視野が広くなるとともに、新しい業務に従事したときに助言を求める仲間もできる」と話していました。

フロアからも多くの質問が示され、職員の関心の高さがうかがえました。報告会の最後に講評を行った岩切健一郎事務局長は、「新たな人的ネットワークが構築されたことと、異なったカルチャーでの経験に基づく気付きが得られたということが、共通した成果だった。大学の財産は人財。他の職員のみならずもぜひ積極的に外部機関での研修に参加してほしい」と語りました。



フロアから積極的な質問も

◆ 青山学院大学の三木学長ら招き「テクノロジーの進展と人間社会」講演会

人文社会科学部が10月31日（水）、青山学院大学学長の三木義一氏と、同大シンギュラリティ研究所客員研究員でゲームクリエイターの齋藤由多加氏を招き、「テクノロジーの進展と人間社会—シンギュラリティ研究所の活動を通して」と題した講演会を開催しました。本学の教職員や学生など100人以上が参加しました。

この講演会は、本学が来年（2019年）に創立70周年を迎えることを記念し、学部の提案に基づいて実施する「先端リサーチ講演会」として企画されたものです。青山学院大学では今年度、「シンギュラリティ研究所」を新設し、注目を集めています。講演に先立って人文社会科学部の内田聡学部長から、「テクノロジーの用語が当たり前のように日常の中で使われるようになってきているが、ここでは人間とは何かが問われており、また制度設計等の面でも、人文社会科学系が果たすべき役割は大きい。それを教育・研究に活かしていくことが課題であるが、シンギュラリティ研究所はいち早くそれに取り組んでいる」と本企画の趣旨について説明がありました。

講演で三木氏は、「シンギュラリティ（注：AIが人類の知能を超える時点）が実際に起こるかは分からないが、大学人がしっかり検討することは間違いなく必要」と研究所設立の狙いを述べ、学生たちの中から着実に関心が高まっていること、そして具体的な取り組みとして、近未来型図書館の実現や過疎地における自動運転の実践研究を進めていることを紹介しました。

続いて登壇した齋藤氏からは、自身が開発した、音声認識技術を用いたゲームソフト“シーマン”などを事例に、クリエイティブの過程において予想できない困難や欠点に直面したとき、その欠点を製品仕様の新たな強みとして転換することの重要性が語られました。その上で、「既に学問になっていることはAIに任せれば良いが、学問化されていないことや系統化されていないことを体系化することは、人間にしかできない」と述べ、現在取り組んでいるAIの研究開発の事例などを紹介しました。

これらの講演は参加者にも大いに感化された様子で、質疑応答では多くの質問の手が挙がりました。このうち人文社会科学部の学生は、「体系化されていないことを体系化する、というスキルにはセンスや高いレベルが必要。自分は固定観念に縛られがちなので、意識的に物事を疑うように努めているが、そういう力は訓練できるのか」と質問。それに対し、三木氏は、「疑うことは大事。その過程で知らない世界があることを自覚し、勉強していく中で、クリエイティブな人に出会うと一気に刺激を受ける。あなたもきっと大丈夫」とエールを贈りました。



講演する三木氏



斎藤氏による講演



学生からもさまざまな
質問が示された